

WACOM VISION

from NOBUTAKA IDE

一番のファンとして、僕が伝えられること
今日だけは、ワコムのお話をさせてください

ワコムに身を投じて以来、ひとつの生命体にも喩えらえるこの会社の持つ奥深さに触れることで、「誰よりも熱いファンになっていった」と語る代表取締役社長 兼 CEO・井出信孝。長く抱いてきた「人間を支えたい」という想いは、多くのチームメンバーと共に歩むなかで、着実に実現へと近づいている。ワコムの持つ価値とその先に広がる未来について、自らの言葉で語る。

Prologue

Wacom Story Book (以下ストーリーブック) を手に取っていた。これは僕らワコムの飾らない姿を、より広く、より深く知っていただくための、ひとつの新しい挑戦です。ここには「いまのワコム」を構成する人物たちが登場します。道具屋・ワコムが磨き上げた製品をご愛用いただいているお客様、未来に向かって一緒に【体験の旅】を創り出しているパートナー、厳しくも温かい目で常に叱咤激励してくださる投資家の方々、そして、日々共に歩むチームメンバー（ワコムでは従業員をこう呼びます）の面々。世の中の移り変わりに柔軟に対処しながら、姿を変え続ける【生命体・ワコム】にとって、誰一人欠くことのできない大切な仲間です。一人ひとりが紡ぐ言葉は、どれも小さな「物語」でもありません。ワコムにまつわる物語に耳を傾けて欲しい。それぞれの物語に宿る温かな【心の灯り】を見つけてもらいたい。そうした想いを込め、このアンソロジー（撰集）に「ストーリーブック」という名を託しました。これから定期的に、ワコムの心躍るような冒険譚をお届けしたいと考えています。まずは「ワコムが一番のファン」を自認する僕が、尽きることのない魅力についてお話ししたいと思います。

僕はこうしてワコムのファンになった

僕はワコムを創業したわけでも、ワコムで特別な教育を受けたわけでもありません。その僕が「ワコムのファン」になったのは、ひとつの生命体ともいえるこの企業の全貌、

底知れぬ魅力に心を奪われたから。ワコムの使命、それは「【描く/書く】を実現するための道具づくりを続けること」。「ライフロング・インク (Life-long Ink)」という約束も、僕が考え続けてきた「人間を支えたい」という想いとも分かち難く結びついています。

「人間とは何か?」「人間を支える術はあるのか?」僕が長く考え続けてきた課題意識です。【描く/書く】は「人間をその人たらしめているもの」のひとつであり千差万別です。その行為と密接に関わるワコムのビジネスは「人間の本質」「人間の創造性」に関わることだと感じました。ワコムであれば、【描く/書く】を通じて人間のすべてを支えられるのではないかと。こうした直感がワコムへの転身につながりました。

僕が「ワコムが一番のファン」を自負するに至った理由は、そのビジネスが秘める「無限の可能性」に気付いたことです。「ワコムの技術は人間のすべてを支えることができるのでは?」という直感はあったものの、入社後に配属されたのはワコムのテクノロジーをOEM提供先メーカーに提供する「テクノロジーソリューション事業」でした。それまで、【描く/書く】、特にデジタルツールでの【描く/書く】は、創作・作品づくりに関わる【クリエイター/アーティスト】だけの、ある種特別なものだと考えていました。ところがテクノロジーソリューション事業でのビジネスは、「描き付ける/書き付けるという行為は日常の至るところに溢れている」ということを教えてくれました。ワコムに入社して、この事業に携わったからこそ、僕はワコムの全貌を見ることができるようになっ

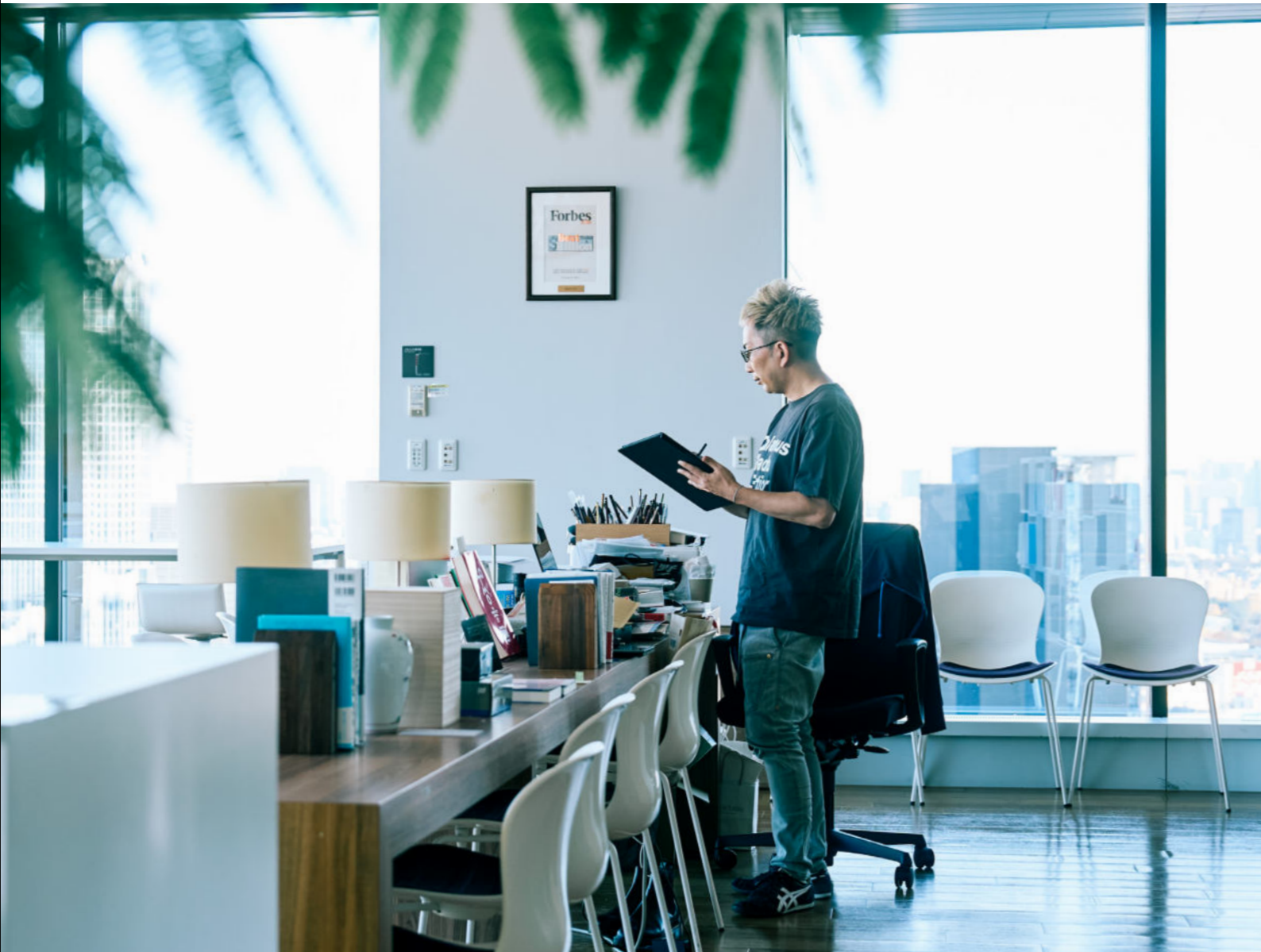
たと言っても良いかも知れません。

ワコムの魅力と奥深さ、その最大の要素は「お客様との距離が極端に近いこと」です。ワコムのお客様は、ワコムのディスプレイ（液晶ペンタブレット）やペンタブレットを使ってくれるユーザー、ワコムのテクノロジーを提供しているOEM提供先メーカー、未来の体験価値について語り合うパートナーなど多岐にわたりますが、すべてのお客様との距離がとても近いのです。それは、ワコムが明確な目的のために価値を提供していることに起因します。【描く/書く】を軸として「創造する」「記録する」「学ぶ」という目的があるからこそ、ワコムが果たす役割も明瞭になります。ワコムのテクノロジーが百人百様のお客様の目的に直接つながっているのは、大きな誇りです。

僕はワコムという集団を生命体のように感じています。誕生から40年間生き続けてきた「ひとつの生命体のような存在としてのワコム」。その行く末に興味が尽きません。CEOという立場でワコムを率いてはいますが、僕自身が動かすわけではなく、ワコムに突き動かされ、ワコムが進みたい方向に導く助けをしているにすぎないのでは? と思います。

この「ワコムに突き動かされている」という感覚は、振り返れば2019年の「コネクテッド・インク (Connected Ink)」(⇒P68&69 _コネクテッド・インクについて) で強く感じたことと記憶しています。コネクテッド・インクは、「創造的混沌」をテーマに「【問い】を立て、意見を交わし、次なる【問い】につなげること」により、創造性の未来を探求し続ける実験的空間。2019年のコネクテッド・インクで、「もはやこのイベントはワコムだけのものではな





【描く/書く】と密接に関わるワコムのビジネスは「人間の本质」「人間の創造性」に関わることだと直感したのです。

い」と感じました。参加して下さる一人ひとりに大切なものがあり、社会にインパクトを与える様子を見て、【生命体・ワコム】が僕らを動かし、大きな渦に巻き込んでいくような感覚に包まれました。それは、「新しい文化を創っていけないのではないか?」という強い予感でした。その場に集う人々が「次世代につながる文化の萌芽を大切に育てるという使命を帯びた」とも言えるかも知れません。「新しい文化を創る」というスピリットは、ワコムのなかで日々成長しているように思います。

ワコムは、「ライフロング・インク」(⇒P18&19_ライフロング・インクについて)という「約束」を掲げています。それは、「ワコムがお客様に対し、インクを通じて【体験の旅】を届けるという『約束』」です。その「旅」は、ワコムがお客様の生涯を通じて届ける「体験」から成るものであり、この「体験」を生み出すのは、ワコムが磨き上げているデジタルテクノロジーです。「インクに関わるデジタルテクノロジーが実現する体験を、お客様の生涯を通じて(=ライフロング)提供し続けることで、お客様と共に旅をする」というのが、ライフロング・インクの意味するところになります。デジタルテクノロジーは時間と空間を超えます。製品と技術のみならず、「製品と技術を通じた体験を届ける会社」であると自覚し、すべての人生を「一生」という時間軸で支えるという意味表明をライフロング・インクという言葉に込めています。もしかすると一生さえも超え、死してなお続く物語を紡ぐことができるのです。

ワコムに感じる「4つの魅力」

ワコムに感じる魅力は数え切れないほどあります。ここでは「テクノロジーを追求する姿勢」「愛憎入り混じるお客様との関係性」「独立と協調の両立」「チームメンバーの想いや誇り」という4つの観点に絞ってお話します。

01 愚直なまでの技術追求の姿勢

ワコムの価値の源泉はテクノロジー。徹底的な技術追求の姿勢こそが「ペンを通じた新しい体験」を届けるために最も重要です。CEO就任後初の意思決定も「ワコムは技術会社である」と宣言することでした。【中期経営方針 Wacom Chapter 3】の【5つの戦略軸】のひとつとして「テクノロジー・リーダーシップ(Technology Leadership)」を標榜しています。これは「技術開発に経営資源を集中的に投下し、圧倒的な体験を届ける」ことを指します。ワコムはテクノロジーそのものではなく、テクノロジーを「体験」に翻訳して届けます。この圧倒的体験の実現を目指し、テクノロジーへの投資に注力しているのです。

少し長い目で見ると、「【描く/書く】という行為の未来」についても考えておくべきかも知れません。人間が存在する限り、【描く/書く】の重要性は変わらないでしょう。一方で、「破壊的技術」の登場が、意味や定義を根本から覆すという可能性もゼロではありません。【描く/書く】と人間との関係も予想のつかないものになるかも知れません。それでも、【描く/書く】という行為は人間の根源的欲求のひとつ

です。いつ訪れるかもしれないその時のためにもテクノロジーを大切に、次世代へ継承することが欠かせないのです。

デジタルテクノロジーが内包する「危うさ」から目を背けてはならないとも考えています。即時性、効率性、生産性、再現性といった恩恵をもたらすと同時に、誕生以来、人類が育んできた「人間性」や「人間の創造性」を毀損しうる、もっと言えば「いとも容易く無力化してしまうのではないか」という懸念を持っています。ワコムが関心を寄せるのは「もっと移ろいやすい、シグナル(重要な情報)とノイズ(雑音)が混在するような情報」です。それを捉えて可視化できれば、そこには新しい体験が生まれるはずだと考えています。時空を超えて揺蕩う情報、千々に乱れる想いや言霊をデジタルテクノロジーで捉え、価値を見出したい。その実現に自信があるからこそ、臆することなくこの課題意識を問いかけることができるのです。

ここでワコムがお客様に届ける【3つの体験】についてお話ししましょう。第1の体験は「『筆が走る体験』をクリエイターに届ける」こと。この体験を届けるのは「クリエイティブソリューション」であり、ワコムブランド製品群がその役割を担います。言うなれば「スピードのエース」。最強の一枚を持っているから、ワコムは【クリエイター/アーティスト】に最高のペン体験を届けることができます。第2の体験は「日常に溶け込む『ペン体験』」。世の中へ【デジタルペン体験】を広く深く浸透させていくのは「ビジネスソリューション」と「テクノロジーソリューション事業」。ビジネスソリューションはワコム製品をあらゆるビジネスシーンに浸透させること

で、テクノロジーソリューション事業はワコムの持つデジタルペンやデジタルインクの技術を通じてOEM提供先メーカーの製品に付加価値を与えることで、その体験を実現します。同じカードに^{たと}喩えるならば、多彩な数字とマークの組み合わせを取り揃えることで、あらゆる場面に^た対応できる最強の布陣を敷くというイメージです。そしてお客様に届ける第3の体験は「『道具体験』の先にあるもの」。文字や絵に宿る言霊を読み解き、新しい体験価値へと昇華させる。この体験を届けるのは「インクディビジョン」の役割となります。「一枚の最強のカード」と「多種多様な個性的なカード」。両方を揃えていることがワコムのストロングポイントなのです。

02 あまりにも、あまりにも熱いお客様の存在

ワコムの魅力、その2つ目は「愛憎が表裏一体となったお客様との関係性」。「愛して、愛して、愛しすぎる。それ故に、少しのボタンの掛け違いで、愛が憎しみへと転換しうる」という感情です。ワコムのお客様は実に多岐にわたります。ワコム製品を自らの身体の一部のように操る【クリエイター/アーティスト】たち。学びなどの道具として日常的にワコム製品を使っていた人たちが。ワコムのテクノロジーを通じて共に製品や体験を創っていくOEM提供先メーカーやパートナー。誰もがワコムに対して「愛憎が表裏一体となった感情」をぶつけてくれるのです。

創作に携わる人たちは作品に命をかけています。その道具を手がけるワコムは、ある意味で彼ら・彼女らの「命を預かっている」とも言えま

す。命を預ける相手であるからこそ、そこに向けられる感情の激しさの度合いは必然的に高まらざるを得ない。OEM提供先メーカーについても同じことで、ワコムのテクノロジーが「ビジネスの命運を握っている」のです。【クリエイター/アーティスト】は「魂を込めて創作する」という使命、OEM提供先メーカーは「最上の製品を届ける」という使命、ワコムは「その情熱に応えるために全力で貢献する」という使命を帯びて真剣に対峙しています。互いの使命に忠実であろうとするからこそ、そこには損得を超えた親密な関係が生じるのでしょう。

CEO就任からほどなくして、あるクリエイターから厳しい言葉をいただいたことがありました。「ワコムは私たちクリエイターの覚悟というもの^をを全く理解していない。言いたいことは山ほどあるが、言葉にする気にもならない。今後はもうワコムの製品は使わない」と。返す言葉もありませんでした。その言葉を胸に刻んで取り組んだのが【Wacom Cintiq Pro 27】(⇒P24-27_クリエイターに届ける最高の道具体験)の開発でした。お客様の声に応えることを至上目的に据えて開発した渾身のフラッグシップモデル。先のクリエイターはこの製品に触れた時、「私たちの声を聞いてくれましたね。これこそが欲しかったもの。素晴らしい製品をつくってくれてありがとう」と仰ってくださったのです。思わずその場で涙しました。

OEM提供先メーカーとは技術的要求や納入コストについて、お互いに神経をすり減らすような厳しい交渉が続きます。あるお客様の社内で圧倒的な実績と存在感を放つ「伝説のエンジニア」が、引退後、「これまでたくさん難しい注文を出

してきたが、ワコムは共にイノベーションを起こしてくれた」という言葉を掛けてくださいました。これ以上の褒め言葉があるでしょうか。

ワコムの製品や技術は【描く/書く】という目的特化型のため、好きも嫌いも一瞬で判断され、あらゆるフィードバックが迅速に届けられます。そのため、技術開発サイクルを高速で回すことができます。【描く/書く】という行為が極めて個人的な感覚であるため、すべての人から高く評価されるテクノロジーは、永遠に完成することのない、まさに「終わりのない宿題」のようなもの。それが僕らのやりがいにつながっているのです。

03 【ひとり歩む】と【共に歩む】が並び立っていること：パートナーとの共創

ワコムの魅力、その3つ目は独立と協調の両立、すなわち「【ひとり歩む】と【共に歩む】が並び立つ」という特徴です。【ひとり歩む】とは「自分たちの信じる道を、覚悟を持って進む様子」を指します。ワコムで言えば、デジタルペンやデジタルインクの技術を突き詰めてきたことが該当するでしょう。技術や製品を磨き上げるだけでなく、未知の市場をも切り拓いてきました。一方の【共に歩む】は「外部との関係性を築き、コミュニティを創ること」。【ひとり歩む】と【共に歩む】の並立が、ワコムの強みであり魅力です。

先駆者たちとパートナーシップを築けるのは、【ひとり歩む】ことをひたむきに続けてきたからに他なりません。ワコムのテクノロジーは唯一無二であるため、全く異なる分野からも注目と関心を集めます。真に価値のあるテクノロジーを育ててきた

ワコムのパートナー候補
アライアンスの機会は
ほぼ無限に存在しているのです。
これはワコムにとって福音であり
最高の事業環境と断言していいでしょう。





「ライフロング・インク」とは
ワコムがお客様に対して
【体験の旅】を届けるという「約束」です。

から、あらゆる世界のトップとも対等な立場で組むことができるのです。

ワコムと【共に歩む】パートナーには「技術パートナー」「ビジネスパートナー」「文化共創パートナー」という3つのカテゴリーが存在します(⇒P60_ワコムを取り巻くコミュニティ)。もちろん、この区分けは厳密なものではなく、パートナーによっては複数のカテゴリーに含まれる場合もありますが、パートナーとの連携が「ワコムだけでは知り得なかった世界」を見せてくれているのは間違いのない事実です。パートナーとの関係から、ワコムは多くのことを学んでいるのです。

デジタルテクノロジーの最大の特徴、それは「掛け算の可能性」です。技術と技術の掛け合わせが起こりやすいということは、次々と現れる新たな製品・サービスを見れば明らかです。ふと見渡せば、実に多くの分野で技術のイノベーションが誕生しています。そしてワコムは、デジタルペンやデジタルインクの分野でのイノベーションを誘発する可能性を秘めた突き抜けた存在でもあります。ワコムの技術は他のどんな技術とでも組み合わせられる。ワコムのパートナーになり得る相手は、ほぼ無限に存在しています。これは最高の事業環境と言っていでしょう。

04 チームメンバーの 想い・誇り = 心の灯り

ワコムの魅力、その4つ目はそれぞれのチームメンバーが持つ【心の灯り】です。CEO就任後、世界中の拠点を回ってチームメンバーと対話しました。その時に感じたのが「一人ひとりがそれぞれの使命感を持ってワコムでの仕事に取り組ん

でいる」ということ。それぞれのお客様の期待に応えようと「1mmずつの進歩」に誇りを持って進んでいる。彼らの言葉から矜持とも言えるものを強く感じ取りました。際立った「個」の集合体。これこそが【生命体・ワコム】の正体ではないかと思っています。

ワコムに溢れる小さな【心の灯り】に光を当て、後押しする活動が「社会への取り組み(Social Initiatives(⇒P70_ワコムの社会への取り組み))」です。それは、喜び、怒り、哀しみ、楽しみといったチームメンバーの心の奥底から湧き上がる想いを原動力としたもの。そのどれもが、誰に強要されるでもなく、チームメンバー自身の信念や情熱に支えられています。一つひとつの活動は、必ずしも世の中を変えられるような驚くべき取り組みではないかも知れません。それでも信念に従い、自分ができることに自分のやり方でも対峙している「小さな物語」です。ビジネスと社会貢献の境界線が曖昧になり、ほとんど溶け合っているような取り組みも少なくありません。【心の灯り】が「社会への取り組み」の世界を押し広げていければと考えています。

「道具屋」であることを 決して忘れない

僕らは【体験の旅】を届けるという約束をしています。その体験はワコムがつくる道具を通じて実現するもの。ワコムは「道具屋」であることを忘れず、使い手を支え続ける自覚を持っています。「筆を止めないこと」「筆が走る体験を提供すること」「創造性を加速させること」は道具屋・ワコムのプライドなのです。

ワコムの立ち位置は、あくまでも「道具屋(instrument provider)」です。「道具」の英訳に“tool”ではなく“instrument”を充てたのは、手に馴染む感覚や、使い手に寄り添う存在でありたいという願いを込めているから。要素技術のみを提供するソリューションカンパニーではなく、あくまで「道具屋」でありたい。技術だけを切り出すのは難しくありませんが、ワコムが届けたいのは「道具を通じた体験」なのです。

道具屋としてワコムが守りたいことがあります。まずは「(使い手の)筆を止めないこと」。ワコムの道具が原因・障害となってクリエイターの創作や思考を止めるようなことがあってはなりません。そのために「デジタルインクの遅延」を極限まで減らし、「液晶画面に生じる視差」をゼロに近づけるなどの挑戦を続けているわけです。次に「筆が走る体験を提供すること」。頭で考えることなく自ずと筆が走るような感覚を提供するのが、僕らの守るべきことです。最後に「創造性を加速させること」。「筆が走る」ことから「思考が深まる」「創造性が豊かになる」という、これまでにない体験が実現できたら素晴らしいことです。「創造性に刺激や閃きを与える道具」をワコムが届けたいのです。もちろん、「筆を止めないこと」はクリエイティブな領域に限ったことではありません。ビジネスシーンにおいても道具が原因で筆を止めることがないように、ワコムはテクノロジーを磨き続けています。

道具屋自身は、果たしてクリエイターになり得るのでしょうか？ 創作の主役は言うまでもなくクリエイターやアーティストです。才能ある存在を支えるのがワコムの使命で

はありますが、その「才能を支える仕事」も、ある種のクリエイティブに満ちた仕事であるという自信を持っています。

ワコムが向かう未来

ワコムの使命は「【描く/書く】を実現するための道具づくりを続けること」。しかしながら、この使命も不変ではなく、世の中の移り変わり、技術の進化、競争環境の変化などに合わせて常に形を変えていくもの。これこそ、40年にわたって生き続けてきた【生命体・ワコム】の真骨頂だと思うのです。

変わり続ける【生命体・ワコム】は、道具屋としての誇りを失うことなく、「総合的な体験価値を提供する会社」へと変貌を遂げようとする途上にあります。クリエイターに新たな閃きをもたらす「KISEKI ART (キセキアート)」(⇒P48_デジタルインクが紡ぎ出す新たな可能性)、クリエイターの権利を保護する「Wacom Yuify(ワコムユイファイ)」(⇒P49_デジタルインクが紡ぎ出す新たな可能性)、生徒の学びの過程と特徴を可視化して学びを支えるサービスなど、千態万状の挑戦が動き始めており、すべてが「ライフロング・インクの実現」という一点において明日のワコムを支えます。言わば、テクノロジーを中心に配した曼荼羅です。

財務指標は40年にわたるワコムの存在証明のひとつだと捉えています。その数字の浮き沈みも【生命体・ワコム】が生き抜いた証のようなものです。【中期経営方針 Wacom Chapter 3】では、資本や事業活動の効率性を軸として、ROE

(自己資本利益率)とROIC(投下資本利益率)の各指標をガイドラインとして掲げ、2025年3月期までの「成長のイメージ」をお伝えするとともに、株主様への還元策も示しています。

世の中では「ESG経営」への注目が集まっていますが、「何のためにESG経営を意識するのか?」という点を強く意識したいと思います。ワコムにとって「Environment(環境)」「Social(社会)」「Governance(企業統治)」への取り組みは、あくまで「【体験の旅】を届ける」というライフロング・インク実現のためのプロセスです。2023年4月にはTCFD(気候関連財務情報開示タスクフォース)へ賛同し、その提言に基づいたレポートを公開しました。「ESG経営への対策が求められているから」という社会的要請のみによるものではなく、すべての人間を支えるために必要だから取り組むのです。それ故、ワコムらしさを大切にしつつ、環境・社会・企業統治へのアプローチを練り上げていくべきだと考えています。

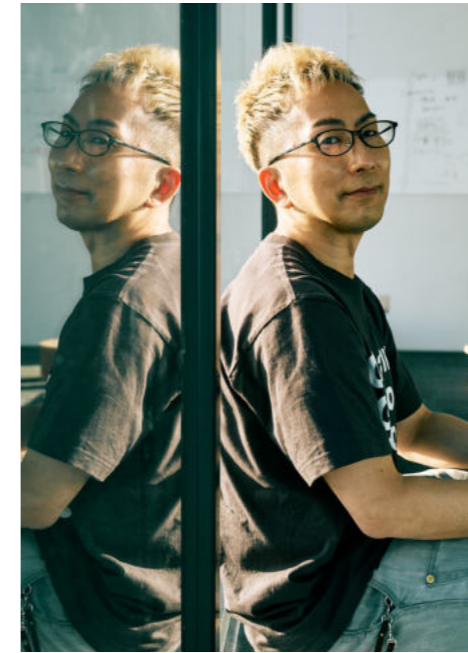
ワコムの使命は「【描く/書く】ための道具づくりを続けること」。しかし、この使命も時代や社会を映すものであり、使命が変われば、求められる経営のあり方も形が変わるでしょう。僕は現在の経営体制、特に社外取締役の顔ぶれには誇りを持っています。それぞれがワコムの使命に共感し、専門性やスキルを活かして経営にアプローチしている。ゴールイメージを共有し、オープンで、時には厳しい議論ができていくという絶対的な信頼感があるのです。

現在を冷静に見極め、現体制でやるべきことを計画・遂行する。これは当然のことですが、それだけでは十分ではありません。急激か

つ予測不可能な変化が絶えない時代にあっては、硬直化した経営体制は恐怖でありリスクです。僕は経営者としての自分自身のタイムリミットに強い自覚があります。そのために「次世代のワコム」を思い描いて、未来の軸となるプロジェクトの推進に全力を注いでいます。技術開発は一朝一夕で成果が出るものではありません。次の世代にバトンを受け継ぐその時まで、「明日のワコムを創るための、いまのワコムを輝かせる挑戦」が続きます。それぞれの使命に向けて、底知れない情熱を胸にプロジェクトをリードするチームメンバーたちを目の当たりにし、その冒険が素晴らしい結末を迎えると信じて疑いません。

Epilogue

ワコムのストーリーブック、その最初の一步がいよいよ始まります。ページを捲った先に始まる物語は「いまのワコム」を読み解く鍵となるでしょう。これまでにお話ししてきた夢や未来がどのように実現されていくのか。その道筋をはっきりと理解していただけるのではないかと思います。現在のワコムには「すでに実現できていること」「これから実現できそうなこと」「まだ実現できていないが、懸命に取り組んでいること」「いつか実現してみたいこと」が渾然一体となって渦巻き、それらはすべてライフロング・インク達成の途上に現れるワンシーンとなることでしょう。【生命体・ワコム】のこれからに、僕自身、期待せずにはられないのです。



井出信孝 | Nobutaka IDE

株式会社ワコム
代表取締役社長 兼 CEO

1970年 東京都生まれ。国際基督教大学大学院行政学研究科(当時)修了後、日本の家電メーカーに入社。米国での商品企画やマーケティング、中国での携帯電話ビジネスの事業開発などに携わり、2013年、株式会社ワコムに入社。テクノロジーソリューションビジネスユニット、シニア・バイスプレジデントなどを経て、2018年、代表取締役社長兼CEOに就任。2021年には、人間の新しい表現と学びを支える一般社団法人コネクテッド・インク・ビレッジを設立し、代表理事就任。読書、楽器演奏と作詞を楽しみ、休日はパフォーマンスの娘とコラボ創作に取り組む。好きな作家は三島由紀夫、好きな音楽はチャイコフスキー、シオン。

CEOメッセージは、Wacom Chapter 3の5つの戦略軸 (P87 中期経営方針) (「Technology Leadership」「Community Engagement」「New Core Tech, New Value Proposition」「Tech Innovation for Sustainable Society」「Meaningful Growth」) に集約されます。この戦略軸に呼応する形でマテリアリティを設定しています。

ワコムのマテリアリティ (重要課題)

- 1 | 技術会社として技術や商品、サービスのポートフォリオを拡大し、新たな価値や事業を創出 (事例参照先:技術革新と新たな体験価値創出 P24、P34、P42、P46、P48、P50)
- 2 | ワコム一社の活動のみならず、コミュニティを形成しながら価値創造と社会的責任を遂行 (事例参照先:コミュニティ連携と共創 P60、P68)
- 3 | 環境への取り組み(TCFDやJCIフレームワークへの賛同など)と併せて、技術と商品を通じて持続可能な社会の実現に貢献 (事例参照先:サステナビリティへの取り組み P72、P76)
- 4 | 個の尊重をベースとした成長空間の提供 (事例参照先:人材への成長空間の提供 P24、P70)
- 5 | 多様な視点による質の高いガバナンス体制を構築 (事例参照先:価値創造を支えるガバナンス P78)



「ライフロング・インク (Life-long Ink)」というコンセプトは、僕自身が常に考え続けてきた「一人ひとりの人生を深く支えるには、どうすべきか?」という問いそのものです。振り返ると、ワコムに入社した当時から、アニメーションやマンガといったプロフェッショナルでディープな【クリエイター / アーティスト】だけを支えるのみならず、「すべての人間の表現に寄り添うのがワコムの在り方ではないか?」という考えを持っていました。僕自身、「必ずしも美しいものばかりではない、人間の抱える暗い深淵」を覗きながら「人間とは何か?」という【問い】を立て続けてきたということもあります。稲妻に打たれたかのように降りてきたライフロング・インクという言葉。渋谷のスクランブル交差点を歩き交う人々、その一人ひとりの背中から色とりどりで太さもさまざまな「人生の一筆描き」が紡ぎ出されている様子が本当にはっきりと見えたのです。

ライフロング・インクという言葉に託した想い

ライフロング・インクは僕の造語です。この言葉を構成する「ライフロング (Life-long)」と「インク (Ink)」という2つの要素を紐といてみます。まずはライフロング。その語義は「(人間の) 一生」「(ある人の) 生涯・人生」。しかし、僕がこの言葉から想起するのは最大公約数的な不特定多数の人生ではなく、やはり、自分そして自分に関わってくれた人々の人生です。そして、その人生には「明るい面 (bright side)」だけでなく、筆舌に尽くし難い「暗い面 (dark side)」も含まれているはず。記憶の欠片のような時間の集合体すべてを包み込むものが、僕にとってのライフロングという言葉です。アノニマス (匿名) ではなく「自分自身の物語」「自分と関わりのある人たちの物語」。僕らワコムが取り組むのは、実際のお客様の顔を思い浮かべながらの価値創造です。

そしてインク。インクという言葉からイメージされるのは、単なる文字や線というよりも、

もっと重みのあるもの。僕は「draw-in / write-in」という表現を好んで使いますが、そこには「描き付けられたもの / 書き付けられたもの」「刻み込まれたもの」「削り出されたもの」という「頭と心を使って生み出されたもの」という想いを込めています。インクには「魂」や「想い」が宿っている。ワコムとして、この「描き付ける / 書き付ける」「刻み込む」ための道具をつくりたいという想いを込めて、僕はこのインクという表現を使っています。このインクは長い人生を通じて記録され続け、保存され、時間と空間を超えて人から人へと引き継がれていきます。それこそが【言葉】と呼ばれるものかもしれません。

A Drop of Ink Will Make "Your" Life Meaningful

「一滴のインクが『あなた』の人生を彩るかもしれない」。僕の中にはこうしたイメージがあります。そのインクの色は美しいかもしれないし、そうではないかもしれませんが、もしかしたらその一滴のインクが「あなた」の人生を変えるかもしれない。それは「祈り」のようなものです。「世界を変えたい」などという大それたものではなく、「あなた」の世界が変わるかもしれないという感覚。人生は必ずしも輝く瞬間だけで満ちているわけではありません。浮き沈みがあり、時に波風も立ち、良い時があれば必ず悪い時もあります。ワコムは、人生の明るい部分だけでなく暗い部分も含めて、そこに寄り添いながら「祈り」を届けるような会社でありたいと思っています。人生に少しの彩りが与えられることは、それがどんな色であっても意味があるはず。ライフロング・インク、それは「インクが紡ぐ、一人ひとりのライフロングを描いた一編の物語」と言い換えてもいいでしょう。

お客様の生涯を通じて提供する ことで共に旅をする

ワコムにとってのライフロング・インク、それは「僕とお客様との約束」です。どんな約束かと言えば、それは「お客様に対して【体験の旅】を届けるという『約束』」です。ライフロング・インクは「ワコムのテクノロジー」でもなく「ワコムのビジョン」でもなく「約束」です。この約束は「不特定多数との漠然とした約束」ではなく、「顔の見える個人と、個としてのワコムとの、とてもパーソナルな約束」に近いイメージです。お客様に約束する旅は、お客様の生涯を通じて僕らが届け続ける体験から成るもの。この体験を生み出すのは、もちろん、ワコムが磨き上げているテクノロジーです。「インクに関わるテクノロジーが実現する体験を、お客様の生涯を通じて提供し続けることで、共に旅をする」のです。ワコムのベースはあくまでもテクノロジー。そのテクノロジーが価値ある新しい体験につながると考えています。

この数年、ワコムはライフロング・インクという言葉や概念を説明するよりも、【体験の旅】を具現化した「手に触れられるもの」をつくり上げることを通じてライフロング・インクのイメージを共有しようとしてきました。創作の過程を可視化する「KISEKI ART (キセキアート)」や、クリエイターの創作の証しや作品のストーリーを残し続ける「Wacom Yuify (ワコムユイファイ)」、生徒の学びの過程と特徴を可視化して支えるサービス。これらのプロジェクトに触れることで、ライフロング・インクが意味するところを体感できる方も増えてきたのではないのでしょうか。一方で強調したいのは、液晶ペンタブレットやペンタブレットをはじめとしたワコムのデジタルデバイス、つまり道具そのものを通じてクリエイターを支えるという熱い想い、それもまさにライフロング・インクそのものであるということです。

ワコムがこれまで大切にしてきた「【クリエイター / アーティスト】というプロフェッショナル・ユーザーに寄り添うという姿勢」は、遥か

昔からライフロング・インクを体現していたのだと僕には思えます。プロフェッショナルに寄り添えば寄り添うほど、その要望に^{ひび}応えていくことが仕事の目的のすべてになり、彼^{わが}の境界が消えてほとんど一体化するという状態にもなります。そうすると、ともすればライフロング・インクとの距離が離れてしまうように感じることもあるでしょう。ただ、僕がライフロング・インクという言葉に自信を持てたのは、「ライフロング・インクをワコムがすでに表現できているという自負があったから」という面も大きいのです。

【体験の旅】の記憶の中に ワコムの道具があって欲しい

「旅」という言葉を用いたのは、そこに秘められたイメージを大切にしたいからです。旅には、明確な目的地に向かって最速の移動手段、最短距離で到達するのではなく、「辿り着きたい方向だけを決めて、途中さまざまな困難に逢いながらも、少しずつでも歩みを進めていく」というニュアンスが含まれています。茫^{ぼう}漠^{ぼく}とした終着点だけを共有し、そこに辿り着くための方法や道のりは人それぞれで構いません。その選択に個性が現れる。旅の楽しみ、旅の喜びは、終着点に辿り着くことだけではありません。新しい発見や気づき、予期していなかった縁や出会い、思ってもみなかった自分自身の新しい顔。そうした数多くの小さな驚きこそが、旅の醍醐味なのではないのでしょうか。お客様に、もしかするとワコムのチームメンバーたちにも、そうした「予期せぬ体験」と数多く巡り合ってもらいたい。そして、その【体験の旅】の記憶の中に道具屋である僕らワコムが手掛けた道具が存在していて欲しい。そんな想いを強く抱えているのです。

【体験の旅】を届けるという約束

それは「創作を支える仕事」と「テクノロジーを提供する仕事」の間をつなぐような、まさに天啓だった。「一生・生涯・人生」を意味する「ライフロング (Life-long)」と「描き付けられたもの / 書き付けられたもの」を指す「インク (Ink)」からなるこの言葉。【体験の旅】を届けるような数々のプロジェクトがヴェールを脱ぎ始めたいま、それは単なる概念ではなく、確かな手触りを宿し始めている。創作を支え続けてきたこと自体がライフロング・インクの実現そのものと言っても過言ではない。つまりは、長く、長く息づいてきたワコムの「魂」を^{こゝろ}言葉に乗せたものこそがライフロング・インクという「約束」と言えるのかもしれない。井出の語る「ライフロング・インクに込めた想い」とは、

Life-long Ink story

WACOM'S PROMISE

ワコムが届ける【体験の旅】とは

ワコムは日々のビジネスを推進していくうえで、以下の3軸を追求している。「クリエイターに最高のデジタルペン体験を届ける」「ワコムのテクノロジーで幅広い顧客に貢献する」「ワコムの命であるテクノロジーを洗練させる」。この3軸を突き詰め、新しい体験価値を生み出した先に、ライフロング・インクの実現が待っているのである。

「ワコムがお客様に対して【体験の旅】を届けるという『約束』であるライフロング・インク。その実現に向けて、日々歩みを進めている。「ブランド製品事業」「テクノロジーソリューション事業」「インクディビジョン」という、3つの柱から整理していこう。ブランド製品事業は「クリエイティブソリューション」と「ビジネスソリューション」の要素によって構成されている。

ブランド製品事業を構成するクリエイティブソリューションとビジネスソリューションは、共にワコム製品を扱いながらも、その性格は大きく異なる。しかし、それぞれが相互に好影響を与えていることは確かだ。ビジネスソリューションは基本的にB2B2Cビジネス。そのため、実際のユーザーではなく、サービス提供者が導入決定権を握る。導入を後押しする要因は「ビジネスへの貢献」が第一だが、その際にクリエイティブソリューションが積み上げてきたペンタブレット/液晶ペンタブレットでの知名度や信頼が後押しになることも少なくない。「板タブ/液タブと言えばワコム」という信頼度が、ワコム製品を社会に浸透させる助けとなっている。逆もまた然りであり、日常生活でワコムブランドに触れる機会が増えれば、いざデジタルクリエイティブツールを手に入れたいと思った時に、ワコムのクリエイティブソリューションが手掛ける製品を真っ先に想起してもらえる機会が増える。

ワコムブランドを取り扱うブランド製品事業と、ワコムのテクノロジーをOEM提供先パートナーに提供するテクノロジーソリュー

ション事業は、ともすれば同じ市場におけるライバルにもなりかねない関係でもあるが、テクノロジーソリューション事業から見れば、ブランド製品事業が築き上げた信頼・実績はOEM提供先パートナーの開拓を優位に進める福音となる。また、ブランド製品事業にとってもテクノロジーソリューション事業が開拓するOEM提供先パートナーの広がりや実績が【クリエイター/アーティスト】に対しても訴求力を持つ。長らく門外不出とされてきたブランド製品事業専用のテクノロジーに関しても、テクノロジーソリューション事業への共有が進みつつある。反対に、OEM提供先パートナーからの厳しい要求に応じて鍛え上げたテクノロジーソリューション事業の知見が、今度はブランド製品事業へと環流することも少なくない。これら両事業の間の技術交流を促進する「ワコム工房」という新たな取り組みも始まり、連携して技術を高め合う流れはますます加速するだろう。

インクディビジョンは、デジタルインクに関わる技術開発を通じてブランド製品事業とテクノロジーソリューション事業の両ビジネスを支える。自社製品であるか、OEM提供先パートナー製品であるかを問わず、技術的要望に対応して解決策を提案するのがインクディビジョンの果たす一番大切な役割だ。ブランド製品事業との間で蓄積した経験が、テクノロジーソリューション事業のプロジェクトに派生するシーンも珍しいことではなくなった。さらには、求めに応じるのみならず、インクディビジョンが開発したテクノロジーが入り口となって新たなビジネスが芽吹くこともあ

る。デジタルインクで記した言葉の意味を認識・処理することができる「セマンティック・インク」の技術により、テクノロジーソリューション事業が舵を取る教育分野での取り組みはさらなる広がりを見せている。ビジネス側が欲するテクノロジーを開発すると同時に、テクノロジー主導で新しいビジネスを生み出す。こうした相互の関係が、この数年のうちに、目に見える成果としてさらに形を現す見込みだ。

現在のワコムは、これまでに培った知識と経験を活かしながら、モノづくりの会社から「体験を届ける会社」へと変貌を遂げる途上にある。その「新しい体験」は、ブランド製品事業、テクノロジーソリューション事業、インクディビジョンという三者が連携して互いに影響を及ぼすことで生み出されていく。その代表的なものが、現時点ですでに形となっている『筆が走る体験』をクリエイターに届ける』『日常に溶け込む『ペン体験』』『道具体験』の先にあるもの』という【3つの体験】だろう。どの体験も、特定の事業が生み出しているのではなく、貢献し合うことで生まれる相乗効果が重要となるのは言うまでもない。

ブランド製品事業、テクノロジーソリューション事業、インクディビジョン。三者は有機的に連携し、ワコムが届ける体験の質をより一層高めていこう。ここからは、『筆が走る体験』をクリエイターに届ける』『日常に溶け込む『ペン体験』』『道具体験』の先にあるもの』という【3つの体験】について、ひとつずつ紐といていきたい。

wacom®

